

日常生活圏からの身体的移動をともなう 「消えるタトゥー」実践

——台湾に留学した日本人大学生たちの語りを事例に——

松嶋 冴衣*

「消えるタトゥー」とは、タトゥーのような見目をしているがタトゥーのように永続的に身体に残り得ない、一時的な身体装飾を指す。旅行や留学という一時的な海外滞在を契機として現地で「消えるタトゥー」がおこなわれるとき、実践者たちはなぜ日本ではなく海外でそれを実践するのか。本稿は、海外滞在と非日常性、そして海外滞在＝非日常における「消えるタトゥー」実践という三者の因果を所与で強固なものとして提示することでこの問いに答えるのではなく、いったんそれらをばらばらの要素に分解したうえで、民族誌的記述をととして改めて組み立て直す試みである。

本稿では、約一か月間台湾（台北市）に滞在した4名の日本人大学生を対象に、彼女らの日常生活圏からの身体的移動をともなう「消えるタトゥー」実践を事例として取り上げた。留学のために台湾に滞在した彼女たちは、街なかで偶然見かけたタトゥーシールを「ノリ」で購入し、台湾滞在中の日々の装いに取り入れた。日本から物理的にも空間的にもかけ離れた台湾においても、彼女たちはさまざまな制約のなかで「消えるタトゥー」を用いていた。日常生活圏からの身体的移動をともなう「消えるタトゥー」実践は非日常における特異点であり、かつそれ自体が非日常性を生起させる装置でありながらも、むしろ連綿と続く各人の個別具体的な「日常」に規定されながら、この実践が非日常的なものとして形成されていることを指摘した。

キーワード

「消えるタトゥー」、タトゥー、非日常、脱埋め込み

* 東北大学大学院

目次

- I はじめに
- II 現代日本社会における「消えるタトゥー」の位置付け
 - 1 タトゥーをめぐる社会的状況と学術的着眼点
 - 2 いま「消えるタトゥー」を調査する意義
- III 身体的移動をともなう「消えるタトゥー」と日常からの脱埋め込み
 - 1 「日常生活圏からの身体的移動」という視座
 - 2 身体的移動によって生起する非日常
- IV 調査の方法
 - 1 「消えるタトゥー」という身体装飾
 - 2 調査協力者と私
- V 「日常生活圏からの身体的移動」をともなう「消えるタトゥー」実践の民族誌
 - 1 彼女たちの装い
 - 2 「ノリ」でタトゥーシールを買う
 - 3 タトゥーシールをどこに貼ろうか
 - 4 タトゥーシールからヘナタトゥーへ
 - 5 「このまま日本に帰りたい」という言葉
- VI 考察
 - 1 「日常生活圏からの身体的移動」によって生じた「ノリ」
 - 2 一時的な日常からの脱埋め込みと「消えるタトゥー」
 - 3 「日常生活圏からの身体的移動」にみる二つの「日常」
- VII おわりに

I はじめに

つかの間の休みを、患者のことは忘れて思いきり楽しもうと、その若い看護師は友人と一緒にバリ島へ飛んだ。そこで解放感を存分に味わい、旅の思い出の印としてタトゥー・ショップで左上腕にヘナによるいれずみをしてもらった。いわゆるヘナ・タトゥー henna tattoo である。それは一時の旅の思い出として、いずれははかなく消える秘めやかなアヴァンチュールであった。デザインとして選んだ富と吉祥の女神ラクシュミ Lakshmi の出来栄も良く、結構満足して帰国した。(小野 2010: 28)

これは、ある看護師が旅先のバリ島でヘナタトゥーの施術サービスを受け、日本に帰国したときの記録である。皮膚科医としての視点から世界各地のタトゥー、あるいはイレズミの文化を記した小野友道は、この看護師のヘナタトゥーを「一時の旅の思い出」(小野 2010: 28) と結び付け、それが「バリの思い出とともに薄れてしま」(小野 2010: 30) うものであると記述した。

ヘナタトゥー、すなわち本研究では「消えるタトゥー」として扱う身体装飾が「一時の旅の思い出」であり、それが時間と共に徐々に消えゆくさまを旅行という非日常から日常に再び戻りゆく過程に重ね合わせる描写は、秀逸なレトリックとして私たちに納得感を与えてくれる。しかしながら、このレトリックは同

時に、私たちに何の違和感も抱かせないほど自然すぎるという点においてある問題を孕んでいるともいえるだろう。私たちはなぜ、海外旅行のゆく先で「消えるタトゥー」を実践することに対して疑問を持ち得ないのだろうか。

この問いが本稿の出発点である。私たちは、日本社会という日常世界の外であれば、そこが日本ではない非日常空間であるという理由だけで「消えるタトゥー」がおこなわれ得るということに納得できてしまう。ここにおいて「消えるタトゥー」とは、海外という非日常性をより際立たせる特別な身体装飾以上のものとして存在しようがないのである。

本稿では、こうした問題意識を端緒に「日常生活圏からの身体的移動」(鍋倉 2024: 232) をともなう「消えるタトゥー」実践の民族誌を描くことで、海外滞在という非日常空間で「消えるタトゥー」がおこなわれ得る理由を改めて問いながら、それが当事者たちによるいかなる意味付けの上に構成されているのかを明らかにする。観光の場面に限らず、海外への留学中にヘナタトゥーなどの「消えるタトゥー」を経験する大学生は少なくないようである。そこで本稿では、日常生活圏からの身体的移動をともなう「消えるタトゥー」実践の一例として、台湾に留学し「消えるタトゥー」を経験した日本人¹大学生たちの語りを取り上げ検討していく。

¹ 本稿における「日本人」とは、日本国籍を有していることではなく、日本の文化的・社会的背景の影響を受けながら社会化されてきたことを意味する言葉として用いている。なお、本稿で名前を出して取り上げる調査協力者の4名は全員日本国籍を有しており、かつ上記の意味で「日本人」である。

II 現代日本社会における「消えるタトゥー」の位置付け

1 タトゥーをめぐる社会的状況と学術的着眼点

人類学的タトゥー研究は、これまで西洋社会の他者として「未開社会」を扱うなかで、当該社会におけるタトゥー実践の社会的機能や図柄の象徴的意味に焦点を当ててきた（彭 2017: 333）。痛みとともに身体に半永久的なシンボルを刻むことは人を特定の社会の成員とする手段であり（山本 2016: 28-29）、たとえタトゥーそれそのものを対象とはしない研究であっても、地域、社会をホーリスティックに描いてきた民族誌にはタトゥーが施された人びとの身体にかんする記述が残されている。グローバル化や近代化のあおりを受けた現代において、伝統的なタトゥー実践の変容についての記述（e.g. 秦 2022）もこうした研究の一部をなすものであるといえるだろう。

それに対し、西洋社会および日本社会といった「先進国」を舞台とした現代のタトゥー実践は、特に社会学や心理学の分野によって消費主義との関連において議論される傾向にある（Kjeldgaard & Bengtsson 2005）。とりわけ、身体的外観の作り直しが自己の再帰的企図としておこなわれる（ギデンズ 2005）とされる時代背景にあって、タトゥーは重大な社会的意味を持たない私的な消費行為として分析される（西山 2007）。そうしたなかで、近年の質的なタトゥー文化研究はより具体的なタトゥー実践当事者の実践過程や経験に着目し、他者との関係性や相互作用という観点からタトゥー実践を描き出す傾向にある。たとえば、ヒップホップ・カルチャーに由来する商品を販売する店で働く都市部の若者を対象に調査をおこなった山越(2012)は、彼らのタトゥー（「スミ」）が特定の集団内における他者との関係性（「縁」）を象徴するものであり、集団内の紐帯を強化する機能を有していることを明らかにしている。ミカロヴァー（2022）は20代から50代までの日本人タトゥー実践者の語りを分析し、自己ナラティブを強化する試みとして現代的なタトゥーを措定するとともに、その実践が他者や社会との交渉、コミュニケーションの末におこなわれていることを示した。タトゥーが社会的逸脱のレッテルを逃れられたとは言いがたい今日の日本社会において、だからこそ、タトゥーという身体への介入行為は個人の内で完結しようのない、極めて社会的な実践なのである。

2 いま「消えるタトゥー」を調査する意義

こうした社会的かつ学術的状况において、「消えるタトゥー」を取り上げる意義とはいかように考えられるだろうか。本研究の対象であり中心的な概念でもある「消えるタトゥー」とは、その名付けからもわかるように、「消えない」タトゥーに対置される概念および実践である。具体的には、ジャグアタトゥー、ヘナタトゥーのような植物の天然色素で肌を染める身体装飾や、タトゥーシール（タトゥーステッカー）、ボディペイントもそこに含めることができるだろう。

「消えない」タトゥーに限られた者にしか開かれていない特別な身体加工としてスティグマ化／神聖化される現代日本社会において、「消える」タトゥーは（「消える」が）タトゥーであり、しかし（「消える」ので）タトゥーではない。つまり、「消えるタトゥー」の実践は日本のタトゥー文化に内包され、かつその規範が適用されつつも、そこから逸脱した営みである（松嶋 2020, 2022）。そして、従来のタトゥー文化の研究枠組みに則ってこの実践を考えると、永続的であるという本質とその価値を失った「消える」タトゥー実践は利那主義的消費傾向が強く顕れたタトゥー（未満の）実践であるともいえよう。すなわち「消えるタトゥー」とは、現代的なタトゥー文化の潮流において一時的かつ流動的なファッション以上のなにものでもなく、まさに私的な消費行為として理解され得るのである。

しかしながら、当事者たちがなにを考え、どのように、なにに規定されながら「消えるタトゥー」を実践しているのかを明らかにしないまま、このように結論付けるのはあまりにも性急である。「消えるタトゥー」はたしかに一時的なファッションという側面を有しており、だからこそ自らの身体を彩る要素として比較的容易に選ぶことができるものではあるが、それはつまりこの実践が単なる私的な消費行為であるということの意味するものではない。むしろ「タトゥーであり／タトゥーではない」ものとしてまなざされる「消えるタトゥー」とは、日本社会のタトゥーをめぐる歴史と、それを取り巻く人びとの認識と実践の複雑な交点として捉えるべきである。

本稿では、こうした視点に立ちながら海外滞在中の大学生の「消えるタトゥー」実践について記述していく。そのために、身体的移動をともし日常からの一時的な脱埋め込みというまさに刹那的瞬間に重なり合うように生起する「消えるタトゥー」実践について、その消費のされ方にかんする議論的枠組みをいったん

脇に置きたい。あくまでも当事者たちの実践と語りを掘り下げながら、海外滞在中の「消えるタトゥー」実践が、非日常における非日常的消費行為であるというよりも、むしろ日常における規範や社会関係を含み込むものとして構築されていく様相を提示する。

III 身体的移動をとまなう「消えるタトゥー」と日常からの脱埋め込み

1 「日常生活圏からの身体的移動」という視座

短期留学先の台湾で「消えるタトゥー」をおこなった大学生たちの実践を描写するにあたり、本研究ではその舞台として台湾や海外、あるいは彼女たちの台湾滞在の経験を一般化して観光や留学という用語でまとめることをできる限り避ける。その理由として、第一に、観光とも居住とも区別できない一か月の留学中の事例を取り上げるということ、そして第二に非日常性やレジャー性、あるいは台湾という地域的文脈に焦点を当てた議論を喚起することなく、日本という日常的生活空間から身体的に離れた空間における彼女たちの実践を捉えるという目的のためである。

観光社会学の観点からゲストハウスにおいて形成される宿泊者同士の即興的かつ一時的な「時限的つながり」について考察した鍋倉 (2024) は、ゲストハウスの機能として「身体的移動によって日常生活から脱埋め込みされた人びとを再埋め込みする「枠」を作り出している」ことを指摘した (鍋倉 2024: 227)。本稿が着目したいのは、まさに「身体的移動によって日常生活から脱埋め込みされた」状況において人びとがどのように「消えるタトゥー」を実践するのか、そして、日常生活からの脱埋め込みがその実践とどのように関連しているのかということである。そこで、あらゆる解釈と先入観を取り除いたニュートラルな用語として「日常生活圏からの身体的移動」という表現を取り入

れることで、あくまでも彼女たちの具体的な実践を端緒としながら台湾、ひいては一時的な海外滞在中の「消えるタトゥー」実践を検討していく。

2 身体的移動によって生起する非日常

それでは、移動やモビリティ、そしてそれとは不可分な領域である観光現象を議論してきた観光社会学および観光人類学は、観光や旅行という行為の検討をとおして、身体的移動によって生じる日常生活からの脱埋め込みをどのように記述してきたのだろうか。

観光文化をめぐる研究は、観光の政治経済的側面を扱う研究、観光の社会・文化的な側面を扱う研究、そして旅行者や旅行の意味にかんする研究の三つに分類できる (山下 2007: 3-5)。そのなかでも本稿の議論と関連するのが「人はなぜ旅行し、旅行の経験が人びとに何をもたらすのかを問う」 (山下 2007: 4) 第三の視点である。

旅行者が旅行をする動機について探究してきた人類学者たちは、デュルケームやリーチを参照しながら旅行を儀礼の過程になぞらえる (Stronza 2001: 266)。つまり、旅行をとおして「ホームにおける」日常的・義務的に労働する状態と「異郷における」非日常的・自発的な聖なる状態」という対比的な時間の繰り返し (グレイバーン 2018: 29-30) を経験することによって、人びとは「新たに生まれかわる」 (山下 2007: 5) のである。ツーリストにとって移動とは日常 (ordinary) と非日常 (extraordinary) を転換するスイッチングの機能を有しているといえる。

そもそも、移動する主体たるツーリストという存在が「非日常を体験することを目的として、自宅からはるか離れた土地を訪れる、一時的な有閑者」²として定義される (スミス 1991: 1) ことからわかるように、非日常の体験を基軸にして旅行者、そして観光 (客) という概念が生み出されてきたことに鑑みれば、旅行、

2 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism, second edition* (1989) の邦訳として『観光・リゾート開発の人類学——ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』(三村浩史監訳 1991) と『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』(市野沢潤平・東賢太郎・橋本和也監訳 2018) が刊行されている。2018年版において、該当部分 (“a temporarily leisured person who travels away from home for the purpose of experiencing a change” (Smith 1989: 1)) は「変化を経験する目的で、家から離れた場所を、自らの意志によって訪問する、一時的に余暇のある者」(スミス 2018: 1) とされている。これは、本稿で採用した1991年版と比較するとより原文に沿った訳といえるだろう。そのうえで本稿において1991年版を採用したのは、監訳の三村らが「for the purpose of experiencing a change」を「非日常を体験することを目的として」と翻訳したこと、そして山下がそれを引用しながら「非日常 (変化) を体験することを目的として」(山下 2007: 4) と紹介したことに、ツーリズムという身体的移動と非日常の分ち難さを見るからである。たとえば観光とみやげものについての議論を展開するゴードンが、該当部分を引用しながら、これを「ツーリストは非永続的 (non-permanent)、非日常的 (non-ordinary、字義通りには extra-ordinary) 経験と関連しているという主張である」(Gordon 1986: 135) と述べている点からも同様の指摘が可能であろう。

観光が非日常性をともなうものとして考えられるのは当然のことであろう。すなわちこれらの研究群の基本的な姿勢として、旅行という形式の身体的移動によって非日常とでも呼ばれ得るものが立ち現れることは議論の出発点に置かれ、それゆえに、身体的移動を介して非日常を経験する人びとがなぜ日常生活においておこなわない体験をしようとするのか、ということが改めて問われることはなかった。換言すると、こうした問題系において「消えるタトゥー」は「日常生活圏からの身体的移動」によって生じた非日常における非日常的行為として把握され、ゆえに、「日常生活圏からの身体的移動」をともなう「消えるタトゥー」実践はそれ以上の説明を必要とする具体的な記述の対象とはなっていない。

これに対し本稿が試みるのは、こうした議論的前提を問い直すというよりも、むしろその前提を同じくするからこそ、非日常という概念を一度手放した状態で「非日常」における「消えるタトゥー」の実践を記述することである。つまり、「日常生活圏からの身体的移動」で非日常が生じるのはそれとして、非日常だから「消えるタトゥー」が実践されるのはなぜなのかを問おうとするのが本稿の目論見だといえる。本稿第5章では、「消えるタトゥー」を実践した大学生たちに

とって身体的移動の経験（と、そこに非日常性と呼ばれるものが立ち現れるのであれば、それ）がどのような状況として具体的に経験されており、そこにおいて日常生活圏ではおこなわれることがなかった「消えるタトゥー」実践がいかに作り上げられていくのかを記述する。

IV 調査の方法³

1 「消えるタトゥー」という身体装飾

本研究は、筆者が2024年10月から12月までの台湾（台北市内）滞在中に得たデータと、日本帰国後の追加の聞き取り調査に基づく。主として取り上げるのは、台湾留学中の4名の日本人女子大学生のタトゥーシールとヘナタトゥーの実践経験とその語りである。

タトゥーシールとは、水を用いて透明なフィルムに描かれたデザインを肌に転写する身体装飾、ヘナタトゥーとは、ヘナ（あるいはヘンナ、指甲花）という植物に由来する天然色素を肌に載せることで皮膚の表皮を染め上げる身体装飾のことである。タトゥーシールもヘナタトゥーも、身体に傷をつけて永続的にデザインを身体に留めるタトゥー⁴とは異なり、時間の経過とともに徐々に消えていく。タトゥーシールは3～

³ 海外における日本人のタトゥー実践を描く本稿の趣旨からは外れるが、地域的な背景を共有するために、注として台湾におけるタトゥーの扱いについて記しておく。筆者の肌感覚を述べるならば、台湾におけるタトゥーを取り巻く空気感は、日本におけるそれとはやや異なるようだった。タトゥーについて研究しているという筆者に対し、派遣先の大学の教員が「台湾でタトゥーをしている人ならたくさんいたでしょう？」と笑いながら話してくれたように、台湾到着の翌日、大学スタッフにすすめられて入った牛肉麵の店でピカチュウのタトゥーを入れた男性店員を見たのを皮切りに、ほとんど毎日タトゥーを入れた人を見かけることになった。とりわけ、飲食店や夜市の屋台で働く男性店員や、廟会に参加する男性たちが腕を覆う和彫りのようなタトゥーを入れていることが多かった。ワンポイントの小さなタトゥーを彫っている若年層の女性も頻繁に見かけた。台北市内を歩いていると、偶然タトゥースタジオを見つけることも珍しくはなかった。日本、特に筆者や本研究の調査協力者たちが普段生活を送る宮城県仙台市と比較した場合、台北市ではタトゥーについて触れる機会が圧倒的に多かったと言える。ただし、これは台湾でタトゥーが一般に受容されているということを必ずしも意味しない。筆者が台湾在住者、台湾出身者から聞いた限りでは、台湾でタトゥーを彫っている人は「真つ当な人だとはあまり思われない」、あるいは「若いときに少しやんちゃしてた人とか思われない」という。両者の発言は類似しているが、一方でタトゥーが喚起するイメージの捉え方は異なっている。これは、台湾のタトゥーを取り巻く寛容さと厳格さの多元性を象徴的に示しているといえるだろう。

なお、現時点で台湾政府によって認められている16の台湾原住民のグループのうち、8つのエスニックグループには、かつて顔や身体に身分や社会的属性を示すイレズミを彫る文化が存在していた。台湾の日本統治時代には、こうした慣習が禁止され弾圧の対象となったため、原住民による「伝統的な」イレズミの文化は現在まで失われてしまっている。

⁴ 本稿ではデザインや手法、起源等を問わず、身体に傷をつけ、そこに色素を入れ込むことで身体に何らかの図柄を描くという行為、あるいはそのような方法で身体に描かれたものを「タトゥー」として定義する。

5日、ヘナタトゥーは約二週間という持続期間⁵の違いはあるものの、本稿では、以上2つの身体装飾のことを「消えるタトゥー」として扱い、議論の俎上に載せる。

2 調査協力者と私

調査方法の一環として、筆者と調査協力者たちの関係についても述べておく必要がある。筆者は調査協力者らと同じ大学、学部に所属しており、大学の協定派遣プログラムで共に台湾に滞在した。私たちは台湾への出発日に待ち合わせ場所のターミナル駅で初めて対面⁶、フライトまでの待ち時間にそれぞれの自己紹介をおこなった。筆者は自己紹介のなかで文化人類学研究室の大学院生ということは伝えた⁷が、研究対象については簡単に「日本の身体装飾文化」と言っただけだった。彼女たちはいずれも人類学や身体装飾文化についての専門的な知識は有していないようだったし、研究遂行上での出会いではなかったため、詳細な研究内容を伝える必要はないと考えたからだ。そのため、台湾に到着して数日後、一人の学生が手の甲にタトゥーシールを貼っているのを見つけた筆者は驚い

た。その前日、台湾に到着してはじめて自由な一日を過ごした彼女らは、あるショッピングモールにてタトゥーシールを見つけ、購入したという。その話を聞き、筆者は自身の研究が「消えるタトゥー」、特にジャグアタトゥー⁸を対象にしたものであるということをお伝え、調査協力の依頼をおこなった。

本稿で扱うデータは、派遣期間中に彼女らと過ごした2024年10月から11月の約一か月間の会話や行動を中心に構成される。本稿で中心的に扱うのは約一か月間⁹の留学中の事例であり、観光を目的とする（たとえば連休や長期休暇を利用した）旅行とはやや異なる性質をともなった海外滞在であったことを申し添えておく。

私たち¹⁰は派遣期間中の約一か月間、同じドミトリーに滞在し、派遣先の大学の同じ講義に出席していたから、ほとんど毎日顔を合わせ、休日も行動を共にすることが多かった。調査に際し、主要な方法としてフォーマルな形での半構造化インタビューなどはおこなわず、派遣期間中の彼女らの会話や行動から、彼女らの「消えるタトゥー」実践に関連するものを取り上げる。また、それらに関連して気になることがあれば、

5 なお、この持続期間はあくまでも目安であり、使用方法や使用者の体質によって前後する。今日の日本において、タトゥーシールは音楽ライブやスポーツ観戦のグッズとして販売されるなど、イベントでのスポット的な使用を意図して用いられる場合が多い。もちろん、雑貨店やインターネットショップで購入し、日常のファッションに用いることも容易である。ポーラ文化研究所が発行する『化粧文化』の2000年前後の記事を見ると、子どものころにタトゥーシール（写絵）で遊んだという記述や、現在進行形で映画や舞台のメイクアップの小道具、地域振興型のお祭りのファッションとして愛用されているという記述が残っている（斎藤 1998; 坪井 2002）。タトゥーシールや後述するジャグアタトゥーとは異なり、ヘナタトゥーは具体的なモチーフの図柄を描いて（貼って）楽しむというよりも、ヘナを伝統的な身体装飾に用いてきた南アジアや中東、西アフリカ地域のモチーフやデザインを取り入れ、唐草模様やペイズリー柄、アラベスク柄などが肘から手の甲、あるいは足首から足の甲にかけて覆うように描かれる。専用のヘナペーストを必要とするヘナタトゥーは、専門サロンで施術を受ける場合が多く、なかにはリラクゼーションサロンやベリーダンススタジオなどでサービスが提供されることもある。顧客層や用途はタトゥーシールと比べると限定される傾向にあると考えられる。

6 調査協力者4名のうち、3名（サユリ、マイ、アオイ）は同じ研究室に所属しており、すでに顔見知りのようだった。

7 なにより、学年、年齢が離れていることで約一か月間の共同生活に余計な緊張感をもたらしたくないと考え、私は「院生」とだけ言った。後日明らかになったが、彼女たちは私が修士課程の学生だと思っていたようだ。

8 本稿の内容とは直接的には関係しないため詳細は別稿（e.g. 松嶋 2020, 2022）に譲るが、ジャグアタトゥーとは中南米原産のフルーツ果汁の染色作用を利用した一時的な身体装飾である。肌を染める原理はヘナタトゥーと同じだが、ジャグアタトゥーは深い藍色に発色し、抽象的な文様ではなく具体的なモチーフが描かれることが多い。日本へは2013年前後からその手法や製品が輸入され、筆者がジャグアタトゥーの調査を始めた2018年から現在に至るまで、徐々に知名度を高めている。たとえば調査協力者の一人、マイは、Instagram や YouTube で「本物みたいな消えるタトゥー」としてジャグアタトゥーが紹介されている投稿が偶然「流れて」きたことによって、その存在を知ったと話してくれた。

9 派遣期間の関係上、筆者のみ二か月間台湾に滞在した。調査協力者の「消えるタトゥー」実践を除く台湾滞在中の記述には、2024年11月から12月までのデータも含む。

10 「消えるタトゥー」について研究している筆者もまた、彼女らの「消えるタトゥー」実践を促進させた、非日常的なアクターの一つであったことは付言しておく必要があるだろう。人類学者が調査対象の社会にどのような（どのように）作用をもたらすかという問題はこれまでも議論の対象になってきたが、本稿はその極端な例の一つと言っても過言ではないのかもしれない。本稿にて扱った事例のうち、筆者が調査協力者たちとともに海外に滞在することがなければ、さらに「消えるタトゥー」を研究していることを告げなければ、いくつかの事例が生じ得なかったことは十分に考え得る。後日おこなった聞き取りにて、上記の懸念点を伝えたくて筆者の存在が「消えるタトゥー」をするという選択にどれほど影響したかを尋ねたところ、そもそも自分たちがタトゥーシールを買ってくるまで筆者が「消えるタトゥー」について研究しているとは知らなかった（マイ、アオイ、ミユ）、自分が研究対象になっているというより、街なかでタトゥーをしている人を見るたびに、「あ、冴衣さん（の研究の対象だ）！」と思うことの方が多かった（マイ）という回答を得た。

普段の会話において、インフォーマルな形で筆者から簡単な質問をすることもあった。日本への帰国後¹¹には追加調査として「消えるタトゥー」をおこなった4名とおこなわなかった1名に対して雑談を交えながら聞き取りをおこない、台湾でのタトゥーシールとヘナタトゥーの経験を再構築・補完する語りを収集した。

V 「日常生活圏からの身体的移動」をとまなう「消えるタトゥー」実践の民族誌

すでに述べたように、調査協力者である4名の女性、サユリ、マイ、アオイ、ミュ（すべて仮名）は、筆者と同じ協定派遣プログラムで台北市内の大学に短期留学していた大学生である。2024年の調査当時、サユリとマイは大学4年生、アオイとミュは大学3年生だった。

1 彼女たちの装い

サユリ、マイ、アオイ、ミュ、この4人の女子学生について誤解を恐れずに描写するならば、彼女らの装いは、筆者が日常的に接している大学生たちを基準とすると、ごく標準的なものだったといえるだろう。ナチュラルなメイクに、極端な露出はせず、一目でブランド物だとわかるような高価できらびやかな装飾品を身につけることもなく、Tシャツや羽織ものに、足首までのパンツやスカート、ワンピースにスニーカーやサンダルという、シンプル、あるいはカジュアルという言葉で形容するにふさわしい姿である。彼女たちはまた、指輪やネックレス、ピアスなどの装身具を身に付けたり、ネイルシール¹²を取り入れたりすることもあった。

留学中の彼女たちは、日本での日常生活から物理的かつ空間的に距離を置くことで、ある程度の自由さで好みのファッションを実践することができていたようである。マイとアオイは大学の部活動やサークルで楽器を演奏しているため、日本では日常的に指輪を嵌めたりネイルをしたりはできないと言う。ミュはしきり

に「派手髪（はでがみ）にしたい」と口にしていた。派手髪とは、金髪やオレンジ、ピンク、青などの明るい色、鮮やかな色に髪を染めることである。ミュは以前、頻繁に「派手髪」にしていたようで、髪をピンク色に染めているときの写真を見せてくれた。しかし、現在は就職活動のために黒い髪に戻した。同じ理由でアオイも「派手髪」を一時的に中断している。アオイの場合、部活動で演奏会の舞台上に上がる際には黒染めスプレーで「派手髪」を隠すこともあったそう。それに対して、大学4年生で大学院に進学予定のマイはセミロングの毛先10センチほどをブリーチ（脱色）し、明るい色に染めていた。応援しているアイドル、いわゆる「推し」のコンサートに行くために、「推し」のメンバーカラーに合わせた染髪だったようだ。

つまり、彼女たちは自分たちの装いに対して一定程度のこだわりを持っていて、その嗜好に沿って着用するものを決めている。また、多少の不満を抱えながらも、部活動や就職活動という特定のコミュニティに要請される装いに対する決まりごとの枠内に自分を収めることも無理なくおこなえる。そして、アクセサリや「派手髪」を含む染髪によって身体を装飾することは日常におこなっているものの、タトゥーを彫ってはいない。このような彼女たちによって「消えるタトゥー」はどのように実践されたのだろうか。以下に見ていこう。

2 「ノリ」でタトゥーシールを買う

台湾に到着して初めての休日、サユリ、マイ、アオイの3人は、宿泊しているドミトリーから徒歩10分ほどのところにある台北101と、その周辺のショッピングセンターエリアへ観光と買い物に行った。いくつかあるショッピングセンターのうちの一つには、日本のファストファッションブランドやドラッグストアチェーンのほか、くら寿司やサイゼリヤといった日本の飲食チェーンが多く立ち並んでいたため、彼女たちはそこで不足している日用品や衣類を買い揃え、食事も済ませたという。そして、そのショッピングセンター

¹¹ 聞き取りは2025年4月、彼女たちが日本へ帰国して約五か月後におこなった。帰国直後、彼女たちは卒業論文の執筆や就職活動で多忙を極めていたので、比較的時間に余裕が生まれたこの時期に追加で聞き取り調査をすることになった。

¹² ネイルデザインが印刷されているシール。爪に貼って使用する。



写真1 アオイの手甲に貼られたタトゥーシール
(2024年10月18日筆者撮影)

内の PC ガジェットやファンシー雑貨を扱う店¹³に偶然入った彼女たちは、そこでタトゥーシールを発見し、購入した。彼女たちはなぜ急にタトゥーシールを購入することにしたのだろう。帰国後に改めて尋ねると、「ノリ」や「台湾に行ってテンションが上がっていたから」という返事が返ってきた。

翌朝、アオイはドミトリーの共有スペースにやって来るなり、すでに集まって朝食をとっていた私たちに対して手の甲に貼った数枚のタトゥーシールを見せた。アオイのタトゥーシールは黒の細いラインで描かれた繊細な花柄で、ところどころに貼られたラメがアクセントになり、きらきらと光っていた。タトゥーシールと日本から持参したネイルシール、指輪によって彩られたアオイの手元を見て、「わあ、かわいい！」と歓声が上がった。(写真1)

筆者はそこで初めて「消えるタトゥー」、そのなかでも特にジャグアタトゥーについて集中的に調査していると伝えることになった。その場にいた調査協力者たちは「へえ〜！」と、やや驚いた風に相槌を打ちながらも、ジャグアタトゥーとは何か、という疑問を見

せることはなかった。そのうえ、マイはヘナタトゥーについて「インドのほうでやるやつですよ」と、ヘナを伝統的な身体装飾に用いてきた地域についての知識も有していた。

3 タトゥーシールをどこに貼ろうか

タトゥーシールを貼るのが初めてだという彼女たちは、シールを小さく切り取って体のいろいろな部位に当てながら、どこに貼ろうかと熱心に悩んでいた。ただ好みのデザインのシールを貼れば良いというわけではなく、自己の身体という有限な範囲といえども、その無数の選択肢のなかからタトゥーシールを貼る場所を決める作業は、デザインの選択よりも骨が折れる作業である。

たとえば、アメリカへの留学中にヘナタトゥーをした経験があるサユリは、「少し見えたほうがセクシー」と言って、二の腕の内側、半袖のTシャツの袖から少し見えるくらいの場所にオレンジやピンク色のタトゥーシールを貼った。アオイはもともと首にタトゥーシールを貼りたいと話していたが、結局その後も首にタトゥーシールを貼ることはなく、二度目も手の甲に同じような大きさのタトゥーシールを貼っていた。

目立つ場所にタトゥーシールを貼りたいという考えを持ちながらも、それを実行に移すことは簡単ではない。「初めての海外への渡航でテンションが上がっていた」というマイは、散々悩んだ末に、「大学があるからなあ」と手首の内側に花柄のシールを貼ることにした。

実際のところ、手首に貼られたマイのタトゥーシールは、後日留学先の大学の学生によって言及の対象となったが、タトゥーシールに与えられたのは非難ではなくむしろ賞賛の言葉だった。派遣先の学科は世界中から学生を募集している機関だったし、マイのタ

¹³ このとき3人が購入したタトゥーシールはロンドンのPAPERSELFというメーカーの商品 Tattoo Meであり、台中の会社が輸入、販売をしている。2025年6月に再訪した際には、この店で当該商品を含むタトゥーシールは販売されていなかったが、同じものは松山文創園區にあるMIT (Made in Taiwan) の商品を中心に扱う店でも販売されていた。台北市内では、若者向けのショッピングモールや、おなじくMIT商品を扱うセレクトショップなどで台湾の会社が制作・販売しているタトゥーシールを購入することができる。現在は休業中だが、後述する西門町にはタトゥーシールの専門店もあったようだ。また、観光地として人気が高い永康街には、台湾原住民の伝統的な文様を取り入れたタトゥーシールが販売されていた。タトゥーシールが台湾の若年層や観光客向けの商品として売られていることがうかがえる。

タトゥーシールを見つけて声をかけたその学生も台湾以外の出身¹⁴で、足首の外側に500円玉ほどのワンポイントタトゥーを彫っていた。ここからわかるように、留学先の大学には、タトゥーをタブー視するような人や価値観は筆者が知る限り存在しなかった¹⁵。タトゥーシールを貼る場所という形で表出したマイの心配、あるいは配慮は杞憂に終わったが、この事例は、日本以外の地域で「消えるタトゥー」を実践するときもなお、日本社会のタトゥーや装いにかんする規範が付きまとうことを示している。

実際に大学に通い初めてみるとタトゥーが問題にならないことはわかった。だけど、台湾へ渡航したばかりの時期にはまだ（大学の）雰囲気はわからなくて、でかでかとタトゥーを入れている人がいたら目立つと思っていた。今考えたら「消えるし良くない？」とは思うけど……。

後日おこなった聞き取りにおいてマイはこのように振り返り、こうした自身の判断が高校在籍時の服装規定に起因するものとして捉えていた。1970年代から服装の自由化が実施され、出身地域でも自由な校風として知られる高校に通っていたマイは、服装規定が厳しくないために、むしろ自分たちでその加減を調整し「やりすぎない癖がついていた」と語った。

4 タトゥーシールからヘナタトゥーへ

3人が購入してきたタトゥーシールに対して最も強い関心を示していたのが、サユリ、マイ、アオイとは別行動をしていたミュだった。ミュは、タトゥーシールに対して「かわいい」「いいなあ」と繰り返し言いながら、どこでタトゥーシールを買うことができるのか3人と話していた。興奮しっぱなしのミュに私は驚

き、どのようなタトゥーシールを付けてみたいのか尋ねてみた。するとミュはすぐに「こういうエスニックなのがいいんです」と、Instagramの検索画面を示して投稿の一覧を見せてくれた。ミュが示したそのデザインは唐草模様やマンダラが手や足を覆うように描かれたもので、タトゥーシールや現代的なタトゥーというよりも、ヘナタトゥーのデザイン、むしろヘナタトゥー（メヘンディ）そのものに見えた。その後、私たちは街中でタトゥーシールを見つけるたびにそのデザインを一枚一枚確認して回ったが、結局ミュの好みに合うタトゥーシールが見つかることはなかった。

ある日、私がマイと「台湾の原宿」と呼ばれる西門町を散策していると、西門駅前の広場でマルシェが開催されていた。マルシェ¹⁶ではハンドメイド雑貨やアクセサリ、ポストカード、焼菓子やお茶が販売されており、休日の午後ということもあってかまずまずの賑わいを見せていた。マイと会場を回っていると、いくつか出店ブースが立ち並ぶ広場の中心にヘナタトゥーのブースを見つけた。ブースには女性の施術者と男性客が一人おり、これから施術を受けようとしていたところだった。次の予定の時間が差し迫っていたので、私は自分で施術を受けることを諦め、ブースのテントに貼られていたQRコードを読み取って店主のInstagramの情報を取得するとともに、ブースの写真を撮影してミュに連絡した。ミュからは、「行きます！」と返信がきた。その日、ミュとアオイは昼過ぎから台北から電車で片道30分ほどのところにある街へ出かけていたこともあり、私は施術を受けに行くとしても後日だろうと考えていた。しかし、予想に反してミュらはその日の夜に施術を受けに行き、帰宅後にその感想を聞かせてくれた。そして、手の甲の「エスニック」な¹⁷ヘナタトゥーにすっかり魅せられた二人は、このように言うのである。「このまま日本に帰りたい」。(写真2)

14 派遣先はアジア、アフリカ、南米、ヨーロッパ、中東など、世界各国から留学生が集う学科で、教員の多くもアジア以外の出身だった。むしろ台湾出身の学生、教員の方が数的マイノリティという状況にあり、共通語としてはマンダリン（標準中国語）ではなく英語が使用されていた。学科の雰囲気として特定の文化背景や規範が優先されるような様子は見られなかった。なお、クラスの中かで日本出身者は私たちだけだった。

15 留学生に限らず、筆者が日本のタトゥー文化について研究していることを話すと、自分も（消えない）タトゥーを彫ってみたいのだと話してくれた台湾人の学生（男性、20代）もいた。

16 筆者は日本国内のマルシェでおこなわれる「消えるタトゥー」（ジャグアタトゥー）についても調査した経験があったため、台湾でも同様に「消えるタトゥー」のショップがマルシェに出店してはいないかと確認するようにしていた。その日以前に訪れたいくつかのマルシェでは「消えるタトゥー」の出店ブースを発見することはできなかった。

17 二人はそれぞれ店にあった見本のなかからデザインを選んだという。ここでミュがヘナタトゥーおよびそのモチーフに期待していた「エスニック」とは、滞在先の台湾やそのほかの特定の地域や文化に明確なルーツを見出すことができるものではなく、たとえばエスニック料理やエスニック雑貨という言葉を用いるときに想定するような、総体としての「エスニックっぽさ」であったと考えられる。



写真2 アオイとミユのヘナタトゥー
(2024年11月2日ミユ撮影、提供)

5 「このまま日本に帰りたい」という言葉

聞き取りを始めた当初、日本では「消えるタトゥー」をしないと話していたアオイとミユの「このまま日本に帰りたい」という発言からは何を示し得るだろうか。じつは、二人のように「消えるタトゥー」を体験したことがある人に話を聞くと、「消えるタトゥー」が消えてしまうのが悲しい、寂しい」という語りに遭遇することが頻繁にある。二人の「このまま日本に帰りたい」という発言には、少なからず「消えるタトゥー」が消えてしまうことへの悲しさも含まれていたのではないかと想像できる。

ここではさらに踏み込み、「このまま日本に帰りたい」というアオイの語りに注目しながら身体的移動をとまっておこなわれる「消えるタトゥー」の特徴を考えてみたい。まずは、この発言に筆者が着目する背景を共有するために、なぜ彼女が日本では「消えるタトゥー」をしないと話すのか、その語りをみていこう。

アオイは小学生のときに読んでいたマンガ作品に「消えるタトゥー」が出てきたときからその存在を知っていて、いつかやってみたいと考えていた。大学生になった今、アオイの友人や知り合いには「消えない」タトゥーを彫っている人が複数人おり、かれらのタトゥーを「かっこいい」と感じている。このようなタトゥーに対しての好意的な感情とは裏腹に、アオイはタトゥーとの距離が近いからこそ「消えるタトゥー」

に手を出すことができていなかった。

タトゥーシールをしてる友達がいたんですけど、そういう(タトゥーを彫っている)人たちが、「あ!」、みたいな。あ、ニセモンやん、みたいな扱い。本物やってる人たちにはそう見える。大人対ガキ、みたいな。

アオイが「そういうのしてない人間ってみんなわかってる」人間関係で構成される日本での生活において、「消えるタトゥー」は疑いようもなく「偽物」と見なされてしまう。だからアオイは「その人たちに日常的に会わないときにやる」。これが、アオイが日本で「消えるタトゥー」をしない、そして台湾で「消えるタトゥー」をした理由である。

こう話すアオイであったが、ヘナタトゥーが残った状態で帰国したいと言うのが筆者には不思議に感じられた。台湾においてなされたアオイのヘナタトゥーは、日常に戻ることによって友人のタトゥーシールのような扱いを受けてしまうのではないか。それについてアオイはどのように考えているのだろうか。

「このまま日本に帰りたい」という発言の意図を尋ねると、アオイは、一生この状態が続けばいいというわけではないと答えた。「台湾でこういうことしてきた」というのを「(ヘナタトゥーが消えて)なくなっちゃう前に見せたい」のだという。

ただし、マイはそれとは対照的な考え方をを見せていた。筆者がマルシェでヘナタトゥーの店を見つけたときに一緒にいたマイは、ヘナタトゥーをすることはなかった。帰国間近だったから、というのがその理由である。筆者らがヘナタトゥーの店を発見した日、そしてアオイとミユがヘナタトゥーをした日は、彼女たちが帰国する10日ほど前のことであった。「(ヘナタトゥーが)消えないまま帰国することに抵抗があった」というマイは、「もし(台湾に)行ったらやっぱりだったらやってたかも」とも言う。日本へ帰国してからもヘナタトゥーがしばらく消えないという可能性¹⁸がその実践の妨げになっていたのである。本章第3項においても指摘したように、たとえ身体的移動によって日常生活からの脱埋め込みが果たされていたとしても、マイにとっての「消えるタトゥー」は彼女が内面化し

¹⁸ 特にジャグアタトゥーやヘナタトゥーといった、染料で肌を染める「消えるタトゥー」が一定期間は「消えないタトゥー」でもあるということについては松嶋 (2020) を参照のこと。

ている規範——つまり、適切な装いを自律的に選択すべきという個人的な価値観と、それに基づく留学中の「タトゥー」にかんする判断、そしてその判断に影響を及ぼす日本社会のタトゥー（らしきもの）へのまなざし、あるいは共有された社会規範——が適応される範囲の外でおこなわれるべきものだった。

VI 考察

本稿では、「日常生活圏からの身体的移動」をとまなう「消えるタトゥー」の実践を取り上げ、これを民族誌的に記述した。それでは、以上の「消えるタトゥー」実践に「日常生活圏からの身体的移動」という要素がどのように作用しているのだろうか。

1 「日常生活圏からの身体的移動」によって生じた「ノリ」

第5章第2節では、偶然立ち寄った雑貨店で見かけた「消えるタトゥー」を「ノリ」で購入した3人の学生について記述した。ここで、なぜピアスやほかの身体装飾、あるいは日本の文脈における社会的逸脱行為ではなかったのか（なぜタトゥーシールでなければダメだったのか）という、より詳細な答えを求める問いは無粋である。ここでは、彼女たちの「ノリ」という言葉をそのまま受け取り理解するために、「音と行為」という観点から米国黒人教会の音楽的礼拝儀礼の記述を試みた野澤（2024）の議論を参考にしてみたい。

野澤は、音楽のパフォーマンスが生みだされるときに緊張感や運動性を表現する言葉として「ノリ」を採用する（野澤 2024: 350）。「音楽が伴わなくても人びとの集うところに半ば偶発的に生じる」、そして「個人の意思によっては生じえない」という含意を読み取れるグルーヴ＝ノリという「卑俗的な」用語（野澤 2024: 350–351）は、音楽的なそれとは異なりつつも、同じく「ノリ」という言葉で示され得るタトゥーシールの購入と、それに続く実践に見出される、その場の即興的な空気感と偶発性を理解する助けとなる。彼女たちの口から自然とこぼれた「ノリ」という言葉は、この実践があらかじめ計画されたものではなく、偶発的に生まれたものであることを何よりも物語っている。

この「ノリ」という言葉から脱埋め込みを示す手がかりとして、バカ・ピグミーの瘢痕文身実践を見ていきたい。アフリカ、コンゴ盆地の北西部に分布するピ

グミー系狩猟採集民のバカは、「テレ（tele）」と呼ばれる瘢痕文身の慣習を有する。主として女性の装飾を目的に施されるテレ実践を調査した彭は、その特徴として即興性や施術の参加への流動性といった自由さを指摘した（彭 2017, 2022）。「ドドド現象」（cf. 木村 2003）という言葉に象徴されるバカの行為的な同調（彭 2017: 342）と、非階級的な社会構造、リネージに基づく人びとのつながりや居住形態、人口の流動性、そして個々人の自律性と他者への寛容な態度（彭 2022）によって実践の自由が担保されているのだという。

翻って本稿で取り上げた学生たちの実践について考えてみたとき、彼女たちが台湾でタトゥーシールを購入した「ノリ」には、（あくまでも即興性や同調性という限定的な部分においてはあがあるが）バカのテレ実践ともよく似た性質を指摘できる。それでは、彼女たちは「日常生活圏からの身体的移動」によってバカのテレ実践を支えるような社会的機制を手に入れたと考えることはできるだろうか。いや、このように結論付けるのはあまりにも性急すぎる。そして、筆者はこれを断じる材料を有していない。ただいえるのは、彼女たちが「消えるタトゥー」の購入と実践を「ノリ」というただ一言で表現できてしまうこと、そしてそれが海外滞在中の「消えるタトゥー」実践の動機として強い納得感を抱かせることそのものが、逆説的に「消えるタトゥー」が「日常生活圏からの身体的移動」によって可能となっていることの証左となるのではないかと、ということである。つまり、バカのテレ実践のような社会的機制を見出すことができない彼女たちの「消えるタトゥー」実践に生じた即興的な同調＝グルーヴ感としての「ノリ」が、「日常生活圏からの身体的移動」によって表出したとしか説明のしようがないのであれば、「日常生活圏からの身体的移動」こそが「消えるタトゥー」を平時の文脈から切り離す説明原理を提供しているということになる。彼女たちの「ノリ」は、「日常生活圏からの身体的移動」によって偶発的に生じた脱埋め込みの兆しとして理解できるのだ。

この前提に立ってマイとアオイの事例を分析してみると、興味深い差異が見えてくる。

2 一時的な日常からの脱埋め込みと「消えるタトゥー」

タトゥーシールを「ノリ」で購入したマイは、しながら、タトゥーシールを貼る場所をなかなか決めることができずにいた。それは、日本で生活を送るな

かで染み付いている「タトゥー的なもの」に対する規範や、その規範(規則)と自分の好みを調整しながら装いを構築するという身体技法との間で葛藤が生じていたからである。留学中という立場、大学という場に考慮しながら目立たない場所にタトゥーシールを貼り、日本への帰国直前であるという理由でヘナタトゥーをおこなわなかったマイの姿からは、内面化された社会的な規範に沿わせて自身のふるまいを変容させるさまを見ることができる。「日常生活圏からの身体的移動」を経てもなお、マイは日常生活圏で培い内面化してきた規範から完全に脱することはできなかった。つまり、マイの「消えるタトゥー」実践においては、日常からの脱埋め込みは生じていたものの、一方でそれは、「消えるタトゥー」の実践を後押しする以上には機能していなかったのである。

マイは、台湾滞在時のタトゥーシールの経験を「夏休みだけ髪を染めるみたいな」ものだったと喩えている。彼女の自認のうえでも、台湾での「消えるタトゥー」は夏休みのような、日常のなかでの一時的なブランクともいえる時間的認識のもとで実践されていたことが指摘できる。帰国までに消えないことを危惧して施術を受けなかったヘナタトゥーについて考えると、その傾向は顕著である。約一か月間のマイの台湾生活においては、「日常生活圏からの身体的移動」は常に「非日常生活圏からの身体的移動」、つまり日常生活圏への帰還と隣合わせに意識されていた。「消えるタトゥー」が一定の期間「消えない」ことは、この時間的連続性をより一層意識させるものになったことは想像に難くない。「日常生活圏からの身体的移動」をとまなう「消えるタトゥー」の実践において、「消えるタトゥー」は日常生活からの脱埋め込みによって引き起こされた「ノリ」の末に達成されるものであるけれども、同時に、それが永遠に続く時間ではないことを現実のものとして冷酷に突き付けるものでもある。

それに対して、「日常生活圏からの身体的移動」ともなった「消えるタトゥー」を新たな文脈に埋め込みなおしたのがアオイによるヘナタトゥーの実践だ。「日本では「消えるタトゥー」をしたくない」と言っていたアオイは、ヘナタトゥーを経験すると考えを一変させ、「このまま日本に帰りたい」と語った。

観光人類学者の橋本は、ファン=ヘネップやリーチの聖俗分離の構造からみやげものについて分析したゴードン(Gordon 1986)の議論を参考にしながら、観光経験を表象し「ものがたり」として人に語るため

の「よすが」となるものとして「みやげもの」を規定する(橋本 2011: 3-5)。日本でアオイを取り巻く人間関係と「このまま日本に帰りたい」という発言をふまえると、アオイの「消えるタトゥー」は台湾での滞在(観光)経験を可視化し、他者に語るための「みやげもの」としての機能が期待されていたことがわかる。とりわけ、この文脈における「みやげもの」としての「消えるタトゥー」は、誰かに渡すための贈答品(gift) = 「おみやげ」としてよりも、「記憶を保存する」という目的で自分のために持ち帰られる英語の「スーベニア(souvenir)」(鈴木他 2023: 66)として理解されるべきであろう。アオイの「消えるタトゥー」は、彼女の身体に台湾滞在の「記憶」を保持するスーベニアであり、身体にあるがゆえに贈答はできないものの、それを起点にしながら他者に「記憶」を語る「みやげもの」でもある。

じつは、「みやげもの」としてタトゥーがおこなわれるのはそれほど珍しいことではない。たとえば日本のイレズミ(彫り物)について言えば、明治から大正期にかけて日本に滞在した外国人旅行者のみやげとして施術されてきたことはすでに複数の研究によって指摘されている(cf. 小野 2010: 57-68; 小山 2010; 山本 2021; Wang 2017など)。日本風の意匠を含みながらも、短時間で小さな図柄を図柄単体でイレズミを彫る(彫られる)ことが多かったために、「当時の日本人の感覚からすれば、外国人向けのイレズミ施術は、数時間の「体験」めいていた」(山本 2021: 45)。このように描写される明治期の外国人の日本「風」の彫り物であるが、日本的なエッセンスが散りばめられた「消えないタトゥー」として、さながら自分自身の身体を利用したスタンプラリーのように一生忘れられない日本への旅行みやげとして身体に残り続ける。

ただし、みやげものとしての「消えるタトゥー」と「消えないタトゥー」は完全に重なり合うものではない。アオイの「消えるタトゥー」は2週間程度で身体から消えてしまうし、日本における彫り物とは異なり、滞在地特有の習俗としておこなわれるものではない。このことは、アオイの「消えるタトゥー」が台湾という特定地域のみやげものとしてよりも、「日常生活圏からの身体的移動」という側面を強調した経験を語るためのみやげものとして意識されていた可能性を導き出す。

みやげものという側面が強調されるアオイの「消えるタトゥー」には、特定の文脈において偽とみなされ

るための参照先となる真が存在しない。そうであるために、アオイとアオイの「消えるタトゥー」は、「消えない」タトゥーを模した「偽物のタトゥー」に向けられるまなざしから逃れることができる。これにより、「消えるタトゥー」を残したまま日本に帰り、それを友人たちに見せたいと言ったアオイの言葉は矛盾なく理解できるものとなる。「日常生活圏からの身体的移動」の経験を語る「消えるタトゥー」＝みやげものは、日本における「消えるタトゥー」とは別様のものとして捉えられる。そしてそれは、日常への帰還後には跡形もなく消えなければならない。「消えるタトゥー」の実践が「日常生活圏からの身体的移動」を契機として生じた「ノリ」によるものであれば、2度目の身体的移動を経て日常生活圏への帰還が果たされたとき、その力が失効するからである。

3 「日常生活圏からの身体的移動」にみる二つの「日常」

つまり、彼女たちは、身体的移動をとおして埋め込まれていた日常の「枠」から抜け出し、「消えるタトゥー」実践をおこなっている。注意しておきたいのは、ここで述べる「日常」とは二重の意味を帯びていることである。すなわち、「ノリ」という言葉から日常生活からの脱埋め込みを指摘した第1節における「日常」と、個別の事例について検討した第2節における「日常」とは、重なる部分がありながらも別のものを指示している。具体的に述べるならば、第1節における「日常」とは日本社会というある種モデル化された生活空間のことであり、第2節のそれは、よりミクロで個別的な「日常」である。後者は二人に共通する日本という日常生活圏をベースにしながらも、各人にとって別々に立ち現れる、より経験的な手触りのある「日常」といえるだろう。

たとえばそれは、その場、その状況に適した装いを自ら作り上げていくべきと考えるマイにとっては日本社会におけるタトゥーや装いに対する規範が適応される「日常」であったし、反対にタトゥー文化に親しいコミュニティに出入りするアオイにとっては、だからこそ「消えるタトゥー」という「偽物」のタトゥーをし難い「日常」であった。このように、身体的移動によって日常生活圏から離れたマイとアオイは、個別具体的な「日常」との均衡を図りながらそれぞれの「消えるタトゥー」実践を編んでいたといえる。「日常生活圏からの身体的移動」をとまなう「消えるタトゥー」

実践は、非日常だからこそ容認される一時的な身体装飾であるが、そこには同時に、彼女たちの「日常」が分ち難く含み込まれているのである。

つまり彼女たちの「消えるタトゥー」は、「非日常」において一時的に身体を彩るためのツールとしてのみあるのではない。「日常生活圏からの身体的移動」ともなう「消えるタトゥー」とは、たしかにごく私的な消費行動でもありながら、「日常」における社会規範や社会関係の集積が身体的移動によって肌の上に顕在化したものとして読み解かれるべきである。

VII おわりに

台湾滞在中にタトゥーシールやヘナタトゥーをおこなった4人は、帰国してから余ったタトゥーシールを使ったり、ヘナやジャグアタトゥーの施術を受けたりすることはなかったという。しかし、それはここが日本であるからとは限らない。

本稿では鍵概念として鍋倉（2024）が述べた「日常生活圏からの身体的移動」に着目してきた。彼女はまた、海外のゲストハウスに滞在する日本人旅行者同士に見られたような時限的なつながりが音楽フェスやスポーツ観戦だけでなく、日常における第三の空間においても見出されること、すなわちそれが「日常生活圏からの身体的移動」をとまなわずとも生じ得る可能性を示唆している（鍋倉 2024: 232）。「消えるタトゥー」についても同様の指摘ができるだろう。実際に、休職中の女性が日本で「消えるタトゥー」を施術した事例（e.g. 松嶋 2022）もあるし、「消えるタトゥー」が音楽ライブやスポーツ観戦のグッズとして商品化されることも増えてきている。マイは今後、「推し」のライブに行くときや肌の露出が増える季節には台湾で購入したタトゥーシールを使うつもりでいるようだ。海外滞在中でなくとも、そして日本であっても、「消えるタトゥー」実践はおこなわれ得る。それは、程度は異なれど、なんらかの形で「日常生活圏からの身体的移動」が果たされているからであろう。

さらに、海外滞在中の「消えるタトゥー」についても興味深い後日談がある。サユリは台湾から帰国して数か月後に、友人とインドに旅行した。旅先ではメヘンディ（ヘナタトゥー）を足に施した日本人の男子大学生と知り合い、彼とメヘンディについての会話を交わしたと筆者に教えてくれた。ただ、自分ではメヘンディの施術を受けようとは思わなかったそうで、イン

ドではメヘンディをすることなく帰国した。ここから、「消えるタトゥー」をおこなおうとすると、海外滞在という形での「日常生活圏からの身体的移動」をとまうかどうかが本質的な条件ではないのだということを改めて強調しておきたい。あるいは実践の当事者たちにとり、なんらかの形（たとえば観光をはじめとする海外滞在）で非日常が創出されていることこそが「消えるタトゥー」実践が生じる不可欠な要因であるとするそれもまた、明らかな間違いとは言わないまでも、この実践の背景を適切に表現できているとはいえない。そうではなくて、本稿で筆者が示そうとしてきたのは、「日常生活圏からの身体的移動」やそれによって生まれ得る非日常が「消えるタトゥー」を生み出す一つの重要な背景ではあるが、それは同時に、個別の背景をひとまとめにした総体であり、そのような意味で背景＝抽象化された説明体系の一つでしかないのだということである。すなわち、こと「日常生活圏からの身体的移動」ともなった「消えるタトゥー」実践にかんして目を向けるべきは、そこに立ち現れる非日常的な時空間が当事者たちにとってどのような「非日常」として個別的に経験されているのか、そしてそれが「消えるタトゥー」実践とどのように連動していくのかという、その過程である。

留学先の台湾で「消えるタトゥー」をおこなった大学生たちの実践と語りを検討してきた本稿では、「日常生活圏からの身体的移動」ともなう「消えるタトゥー」が、日常とは異なる空間において「日常」における規範を投影させながらおこなわれる実践であることを明らかにした。ここに生起する非日常は、日常、あるいは「日常」の反転として逆説的に意識化される。「消えるタトゥー」はその結果として生じた実践であると同時に、その意識化の一つの契機となる実践でもあるといえるだろう。

スティグマを帯びるとともに、偽物のタトゥーなのか本物のタトゥーなのかという視線に晒される「消えるタトゥー」実践は、複雑な評価の網の目に絡み取られた身体装飾の実践である。ある特定の場面では自由さが、異なる場面では不自由さが波のようにあらわれては消えゆく「消えるタトゥー」実践において、「日常生活圏からの身体的移動」という契機はその波の生起を浮かび上がらせるものだった。「日常生活圏からの身体的移動」ともなう「消えるタトゥー」とは、消えてしまうからこそ非日常において実践されるべきものであるとともに、その非日常性を強調するもので

もある。そしてそれはまた、簡単には消すことができないからこそ、非日常の只中にあったとしても、それが日常との地続きのうちにあるということもまた、私たちに喚起するものなのである。

謝辞

本研究は JST 科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 JPMJFS2102 の支援を受けたものである。執筆にあたっては川口幸大先生と越智郁乃先生（ともに東北大学文学研究科）、2 名の査読者から丁寧なコメントをいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。そして、私の研究に関心を持ち、快く何度もお話を聞かせてくれた 5 人の友人たちに心より感謝申し上げます。

参考文献

(日本語文献)

小野 友道

2010 『いれずみの文化誌』河出書房新社。

ギデンズ、アンソニー

2005 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也（訳）、ハーベスト社（Giddens, Anthony 1991 *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Polity Press.）。

木村 大治

2003 『共在感覚——アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会。

グレイバーン、ネルソン

2018 「観光——聖なる旅」土井清美（訳）『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』スミス、ヴァレン（編）、市野沢潤平・東賢太郎・橋本和也（監訳）、pp. 25-46、ミネルヴァ書房（Graburn, Nelson 1989 *Secular Ritual: A General Theory of Tourism*. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism, second edition*. Valene Smith (ed.), pp. 21-36. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.）。

小山 騰

2010 『日本の刺青と英国王室——明治期から第一次世界大戦まで』藤原書店。

斎藤 卓志

1998 「タトゥーの流行」『化粧文化』38: 88-91。

鈴木 涼太郎・花井 友美・金 振晩

2023 「観光客はおみやげに何を求めているのか? —— Web 調査による基本要素の抽出」『観光研究』35(1): 65-78。

スミス、ヴァレン

2018 「序論」橋本和也（訳）『ホスト・アンド・ゲスト——観光人類学とはなにか』スミス、ヴァレン（編）、市野沢潤平・東賢太郎・橋本和也（監訳）、pp. 1-21、ミネルヴァ書房（Smith, Valene 1989

- Introduction. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism, second edition*. Valene Smith (ed.), pp. 1-17. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.).
- スミス、バレーン
- 1991 「序論」 西山徳明 (訳) 『観光・リゾート開発の人類学——ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』 スミス、バレーン (編)、三村浩史 (監訳)、pp. 1-24、勁草書房 (Smith, Valene 1989 Introduction. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism, second edition*. Valene Smith (ed.), pp. 1-17. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.).
- 坪井 正和
- 2002 「フェイクタトゥー」『化粧文化』42: 74-77。
- 鍋倉 咲希
- 2024 『止まり木としてのゲストハウス——モビリティと時限的つながりの社会学』晃洋書房。
- 西山 哲郎
- 2007 「現代の身体加工にみる自己アイデンティティ構築のエコノミー」『中京大学現代社会学部紀要』1(2): 121-139。
- 野澤 豊一
- 2024 「動きを感知する——米国黒人教会のエコロジカル・ミュージッキング」『文化人類学』89(3): 335-354。
- 橋本 和也
- 2011 『観光経験の人類学——みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる』世界思想社。
- 秦 玲子
- 2022 「ニュージーランド・マオリのタトゥー、タ・モコの復興」『身体を彫る、世界を印す——イレズミ・タトゥーの人類学』山本芳美・桑原牧子・津村文彦 (編)、pp. 51-86、春風社。
- 彭 宇潔
- 2017 「女性のファッション——バカ・ピグミーの刺青実践を事例に」『コンタクト・ゾーン』9: 331-346。
- 2022 「「今」の楽しさと関係を刻む人々——カメルーン東南部の狩猟採集民バカのテレ」『身体を彫る、世界を印す——イレズミ・タトゥーの人類学』山本芳美・桑原牧子・津村文彦 (編)、pp. 117-145、春風社。
- 松嶋 冴衣
- 2020 「消えるタトゥーを装う——現代身体装飾の文化人類学的考察」『東北人類学論壇』19: 44-65。
- 2022 「「消えるタトゥー」はタトゥーごっこか——らしさとらしくなさをめぐって」『身体を彫る、世界を印す——イレズミ・タトゥーの人類学』山本芳美・桑原牧子・津村文彦 (編)、pp. 305-336、春風社。
- ミカロヴァー、ズザナ
- 2022 「コミュニケーションとしてのタトゥーイング——自己・他者・社会との関係におけるタトゥー」『質的心理学フォーラム』14: 33-44。
- 山越 英嗣
- 2012 「「縁」をつむぐタトゥー——日本の若者下位文化における身体加工」『現代民俗学研究』4: 73-82。
- 山下 晋司
- 2007 「観光文化学案内」『観光文化学』山下晋司 (編)、pp. 2-7、新曜社。
- 山本 芳美
- 2016 『イレズミと日本人』平凡社。
- 2021 「「日本みやげ」としてのイレズミ——十九世紀から二十世紀初頭における外国人観光と彫師」『日本研究』63: 43-83。
- (英語文献)
- Gordon, Beverly
- 1986 The Souvenir: Messenger of the Extraordinary, *The Journal of Popular Culture* 20(3): 135-146.
- Kjeldgaard, Dannie and Anders Bengtsson
- 2005 Consuming the fashion tattoo, *Advances in Consumer Research* 32: 172-177.
- Smith, Valene
- 1989 Introduction. In *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism, second edition*, Valene Smith (ed.), pp. 1-17. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Stronza, Amanda
- 2001 Anthropology of Tourism: Forging New Ground for Ecotourism and Other Alternatives, *Annual Review of Anthropology* 30: 261-283.
- Wang, Hui
- 2017 The 'Bodyscape': Performing Cultural Encounters in Costumes and Tattoos in Treaty Port Japan, *Global Histories* 3(1): 85-107.

“Temporary Tattoo” through Bodily Displacement from Everyday Life:

A Case Study of Japanese University Students’ Experiences in Taiwan

Sae MATSUSHIMA*

This paper examines the practice of “temporary tattoo,” nonpermanent body decorations that mimic the visual appearance of permanent tattoos, among Japanese youth during short-term stays overseas. It asks why practitioners choose to engage in this activity while abroad, rather than within their home country, Japan. A rigid, self-evident causal link is often assumed between three factors: temporary overseas residence, the creation of a non-routine environment, and the subsequent non-routine practice of temporary tattoos. This study challenges this simplified premise by deconstructing these components independently, and then reconstructing them through an ethnographic analysis.

This paper draws on the experiences of four Japanese female university students who lived in Taipei, Taiwan, for approximately one month. It considers their practice of temporary tattoos as a case study for examining bodily displacement from everyday life. Despite their physical and spatial distance from everyday life in Japan, the students’ use of temporary tattoos in Taiwan remained constrained by the social norms and restrictions that they encountered and that they navigated daily.

The analysis argues that the practice of temporary tattoos, involving a physical relocation from the sphere of routine, functions both as a distinct moment within non-routine experience and as a mechanism for generating such experience. However, the study concludes that this practice is not simply a product of the “extraordinary.” Rather, its very formation as a non-routine phenomenon is shaped and defined by the ongoing and individual-specific “everyday life” of each practitioner. Consequently, although the non-routine context and the practice of temporary tattoos are undeniably closely interconnected, their relationship does not follow simple linear causality but instead reveals a more complex configuration.

Keywords

Temporary Tattoo, Tattoo, Extraordinary, Disembedding

* Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University